

ときわ会新潟東支部 令和元年度

地域教育プログラム

実践記録集



地域教育プログラム集録一覧

- 1 県立新潟聾学校
- 2 県立東新潟特別支援学校
- 3 県立幼稚園
- 4 市立東特別支援学校
- 5 大形小学校
- 6 中野山小学校
- 7 木戸小学校
- 8 東山の下小学校
- 9 桃山小学校
- 10 下山小学校
- 11 牡丹山小学校
- 12 東中野山小学校
- 13 竹尾小学校
- 14 南中野山小学校
- 15 江南小学校
- 16 東新潟中学校
- 17 山の下中学校
- 18 大形中学校
- 19 石山中学校
- 20 木戸中学校
- 21 東石山中学校
- 22 下山中学校

地域で生きる自立の力の育成

新潟県立新潟聾学校

1 育むことを目指す資質能力

特別支援学校教育最大の目標は、子ども一人一人の自立の力を育成することであり、社会での生きる力を育むことである。このたびは、地域社会への出口である当校高等部における地域社会と連携した校内、校外職場実習の取組について報告する。

2 教育課程への位置づけ関連

当校卒業生の進路を分類すると、一般就労及び就労移行事業所、福祉作業所、上級学校進学となっている。したがって、高等部の教育課程は、いずれの進路を選択しても対応できる、自立に必要な意欲・態度、知識・技能、将来設計能力を育成することを主眼に置き編成している。

3 活動の実際

(1) 校内実習

高等部1年生全員が校内の職場実習を6月と10月のそれぞれ3週間に実施している。販売・接客、サービス（清掃・介護等）、製造の3つのコースを設定し、それぞれの生徒の実態と希望を加味して所属を決めている。担当教師が分担し、臨場感をもたせる工夫をして実施している。また、この実習に先立ち、市内事業所からの講師を招き、仕事に向かう姿勢や留意点についての指導を受けている。指導にあたる教員も研修を積んではいるものの、学校外の地域の方の力によりこの実習は成り立っている。そして、自己評価・客観的評価を小まめに行い、向上的意欲および作業能力の向上を図っている。終末では総合評価を行い、実習と日常の学校生活（学習）の連結を強化している。

(2) 職場実習

高等部2年生と3年生は、6月と10月のそれぞれ3週間に、新潟市内外の事業所及び就労移行支援福祉事業所、公立施設等での職場実習を実施している。1年生時の校内実習の評価、日頃の学習の成果、卒業後の進路希望等を総合的に加味して、一人一人の実習先を決定している。この職場実習のコンセプトは、「地域社会に役立つ」「地域で生きる」「地域での自己実現」である。

事前に受け入れ場所との打合せを綿密に行っている。担当教師が一人一人の生徒に同行して実習先を訪れ、仕事内容、仕事の進め方等のレクチャーを実習先から受けるとともに、実習生の特性や課題についての共有を図っている。実習時は、自宅から実習先への自立通勤を行っている。仕事に行くためには、身辺自立や規則的な家庭生活が前提となっており、日頃の学習の成果が凝縮された実習期間となっている。実習期間は、担当教師が実習先を巡回して、生徒の様子を把握するとともに、実習先の職員との情報共有を行っている。地域社会との連携によりこの職場実習の取り組みが成立、充実しているのである。

4 成果と課題

年間カリキュラムに基づいて行われる校内及び校外職場実習を通して、経験を重ねるごとに生徒は成長した姿を見せ、自立に向けた総合力と進路選択の意欲を高めている。

○卒業後の進路の確定

近年は一般就労及び就労移行事業所利用が8割以上を占めている。3年生の職場実習先が卒業後の就職先となる事例が大部分である。将来への見通しをもった取組が社会への入り口とスムーズにつながる。

○卒業後の安定した生活

卒業後始まった生活において、短い年数でリタイアする卒業生の事例もある。生徒の思いと能力の一致が、一人一人にふさわしい進路実現につながることはちがいない。関係機関との綿密な連携、相互の情報交換、情報共有、卒業後のアフターケアにおいてもこれまで以上に力を注ぐ必要がある。

国民総活躍社会には、障害のある人も障がいのない人も共に社会で生きる共生社会の具現が必至である。障害のある生徒の社会への出口を導く当校としては、地域社会との連携による一人一人の生徒の自立の力を育成するカリキュラムのさらなる充実が求められている。これまで蓄積された教育資源の整理と発展を図ることにより、時代のニーズにこたえられる教育活動の展開を図っていきたいと考える。また、社会の中の受け皿である各機関と学校との連携がより重要である。新たな開拓も含め、学校と地域社会とのつながりの強化を図っていききたい。

1 育むことを目指す資質能力

「インクルーシブ社会で自分らしく生きていく力」

2 教育課程との位置づけ、関連

高等学校に準ずる教育課程では主に総合的な探究の時間、知的障害の教育課程では主に生活単元学習（教科等を合わせた指導）として扱った。

3 活動の実際

○県立新潟東高等学校との交流を通して、インクルーシブ社会の啓発や自らが社会の中に飛び込み、関わっていく重要性を学習した。

○主な交流活動

・交流のシンボルマークの作製

東高校生徒会で交流のシンボルマークを考案し、当校生徒が職業生活の授業の中でアイロンビーズで装飾品を作製した。

・東高校の文化祭への参加

生徒に希望をとり、東高校の文化祭に参加した。当日は土曜日だったが、4名の生徒が参加した。準ずる教育課程の生徒だけでなく、重度重複障害の生徒も保護者の付添で参加することができた。東高校の生徒会長に案内してもらい、様々なブースを見学した。車椅子ではなかなか体験することのできない茶道も体験することができた。

・生徒会による共同での社会貢献活動の実施

生徒会同士の話し合いで、共にできる社会貢献活動として「3Rキャンペーン」を実施した。それぞれの文化祭でマイバッグの活用など環境に配慮した生活の啓発や意識調査のためのアンケートを実施し、両校で100部のアンケートを実施することができた。

・授業による交流

国語での授業交流として、当校生徒が考えた詩や俳句を東高校書道部の生徒が書で表すことや当校生徒が考えた上の句に東高校生徒が下の句で応える連歌など同じ場所にいなくてもお互いの授業で学習できる内容で交流を図った。

4 成果と課題

○始めは活動に消極的だったり遠慮がちだった生徒も様々なやり取りをする中で、徐々に関係性が高まり、積極的に自分の考えを述べたり、進んで活動に参加したりする姿が多く見られるようになった。

●交流に積極的に参加する生徒が知的障害のない生徒や障害が比較的軽度の生徒に限られる。障害が重度の生徒も社会に関わり自分らしさを発揮できるように、交流への参加の仕方や場面を考慮する必要がある。

新潟県立大学との連携を生かした地域教育プログラム

新潟県立幼稚園

1 育むことを目指す資質能力

改訂された幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力を「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」として示している。その資質・能力を育む指針として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が具体的に示されている。

当園では、地域と連携し、その10の姿の具現化に向けている。特に当園設立の経緯及び立地面から、新潟県立大学と連携が強固であり、その特色、人材を生かして、10の姿のうちの

・健康な心と体 ・協同性 ・社会生活との関わり ・言葉による伝え合い

に重点を置き、地域教育プログラムを推し進めている。

2 教育課程への位置付け、関連

当園では、地域と関わる教育活動は幼稚園教育課程の4歳～5歳初めの第6期～12期「友達のかかわり・遊びの広がり」、それ以降の12期～15期「協同」における教育活動に位置付けている。

- ・大学の先生との連携：健康な心と体、社会生活との関わり、言葉による伝え合い
- ・大学生との交流活動：協同性、社会生活との関わり、言葉による伝え合い

3 活動の実際

(1) 大学の先生と連携した活動

① 運動遊び

幼児期のバランス感覚やリズム、タイミングなどの調整力を育むねらいで、月1回、新潟県立大学の先生の「運動遊び」の時間を設け、実施している。バランス運動、くも歩き、くま歩き、かけっこ、平均台、トランポリン等の運動に親しんでいる。

② 異文化交流

外国籍の大学の先生から、外国の絵本を読んでもらったり、歌を紹介してもらったりしている。また、クリスマス会にも参加してもらい、たくさんの外国の文化を紹介してもらっている。

(2) 大学生との交流活動

新潟県立大学の学生とかかわる活動を年間通して実施している。ミニコンサート3回、教育実習春期・秋期2回、栄養教育実習2回、夏祭り・運動会、遠足・園外保育、季節行事等)などの活動で子どもとかかわっている。

4 成果と課題

(1) 成果

大学の先生と連携した活動では、専門的な見地からかかわってもらえるため、子どもたちの運動感覚や異文化の興味関心を幼児の発達段階に即して高められている。大学生との交流では、期間によっては、30～40人の学生とが来園し、かかわる機会があり、他人と関係を築く力・集団行動の基礎が芽生えている。

(2) 課題

大学と連携する際の日程の調整を密にしていく必要がある。期間に集中してしまうこと、1～2ヶ月の長期に渡るものもあり、子どもたちのストレスとなってしまうこともあった。また、「10の姿」のうちの他の姿にかかわる教育活動も今後展開していく必要がある。

持続的な地域との関わりを目指す地域教育プログラム

～自分らしく輝くために～

新潟市立東特別支援学校

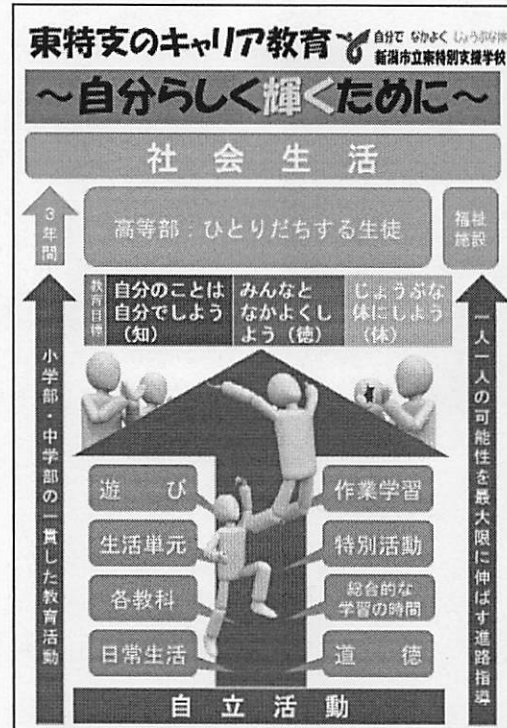
1 育むことを目指す資質能力

当校教育目標「自分のことは自分でしよう」
「みんなとなかよくしよう」「じょうぶな体にしよう」の達成をめざし、様々な力(※1)をつけようとする子。

※1 移動、食事、排せつなど日常生活を行うための力/清掃など家庭生活を営む力/公共施設を活用するなど社会生活を営む力/文字、数、色、量、記号などに興味をもち活用する力/自分の意思を表現する力/他者の意思を理解する力/まわりの人への関心、親しみを感じる力/集団活動に参加する力/運動を楽しむ力/体力を培う力、健康に気を付ける力 など

2 教育課程への位置づけ、関連

それぞれの学習活動や各種教育の目標に沿って、年間活動計画に位置づけ、地域教育コーディネーターとの協働の元、実践している。



3 活動の実際

小学部2年生 (PTA 親子行事)
「リトミック教室」



中学部2年生 (総合的な学習の時間)
「福祉施設の見学・作業体験」



4 成果と課題 (今後の取組)

子どもの姿や、学校の取組を地域の方々に知ってもらうよい機会となった。

今後は、これまでの成果を持続的な取組にしていくために、日常の教育活動(子どもの生活)の中に、地域との活動を埋め込んでいけるよう、地域教育コーディネーターを核にして、学校、保護者、地域の方々と協力して、取り組んでいきたい。

学校と地域で高める防災意識

大形小学校

1 育むことを目指す資質能力

防災教育を保護者や地域の方と一緒にを行う本学習では、学年の発達段階に合わせて学習課題・資質能力や想定される防災の場面を設定している。

	学習内容	育む資質能力
低学年	いろいろな防災に対する身の守り方	・防災の概念 ・【思考判断】問題状況における事実や関係を把握し理解する。
中学年	水害に対する身の守り方	・水害の概念 ・【思考判断】課題解決を目指して事象を比較したり、関連付けたりして考える。
高学年	避難生活の方法	・避難の概念 ・【協同】他者と協同して課題を解決する。 ・【社会参画】課題の解決に向けて地域の活動に参加する。

2 教育課程への位置づけ、関連

本実践は、特別活動の学級活動（防災学習）および学校行事（避難訓練）として行った。

また、当日は、保護者には「一日参観日」として、地域には「地域と学校ウエルカム参観日」として参加を呼びかけた。

3 活動の実際

各学年で行う防災学習には、保護者や地域の方から参加をしていただき、児童とともにそれぞれの課題について考えた。6年生（写真上）では、松井千明様（公益社団法人中越防災安全推進機構）と羽田靖晃様（新潟市東区役所総務課安心安全係）を講師に招き、避難所生活の実際について保護者や地域の方と対話的に学ぶ学習を行った。

その後、避難した児童を保護者に確実に引き渡すための訓練（写真下）を行った。



4 成果と課題

児童・保護者・地域の方のそれぞれの立場から同じ事案について考えることで、より実践的な学びとなったことが成果である。今後は、三者の交流をさらに図っていけるような学習にしていきたい。

地域への愛着を育み、自尊感情を高める地域貢献活動 ～「社会に開かれた教育課程」の充実を目指して～

中野山小学校

1 育むことを目指す資質能力

当校は、新潟市の東区に位置し、地域は、昔からの住宅地域と市営アパートが混在している。現在は、コミュニティ協議会などの活動が盛んで、保護者や地域の人たちは学校の教育活動に協力的である。教育目標「共に高まる子」のもと、児童は意欲的に学習し、落ち着いて学校生活を送っている。特に、仲良し班活動（異学年・異学級交流活動）は年々充実し、互いに協力して活動する姿が見られている。

一方、新潟市生活・学習意識調査等から、自己肯定感が市平均を下回る実態があった。児童に自分の力に自信をもたせ、自己肯定感を高めていくことが課題である。

そこで、当校では、児童に育みたい資質能力を、『児童が自尊感情を高め、自分の力に自信をもって生き生きと活動し、地域への愛着と誇りをもつ』と設定し、地域貢献活動の充実を図った。

2 教育課程への位置づけ、関連

3・4・5・6年生で総合的な学習の中に位置づけた。

3学年「もっとよくしたいな中野山」 4学年「誰にでもやさしい町に」

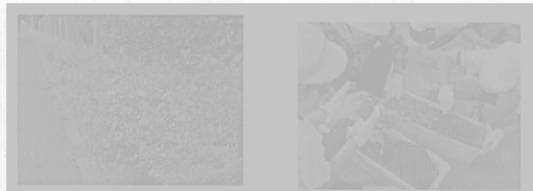
5学年「ポチュラカの苗の植栽」「チューリップの球根植え」

6学年「石山地下道への絵の展示」「地域安全マップづくり」（※4・5学年も一緒に行った）。

3 活動の実際

第5学年「ポチュラカの苗の植栽」「チューリップの球根植え」

中野山小学校区コミュニティ協議会や地域の方に教わりながら、春にはポチュラカの苗を、秋にはチューリップの球根を植えた。今年度は、それぞれ250個のプランターに植え、学校前の歩道に並べた。春から夏にかけて80メートルの花の道が出来上がり、登下校する児童だけでなく、地域の方々の目も楽しませている。



4 成果と課題（今後の取組）

成果としては、児童は、地域貢献活動に共に参加したPTAや地域の方から、温かく声をかけられたり、褒められたりすることで、ますますやる気を増し、役に立っているという自己有用感を高めた。新潟市学習・生活意識調査の結果から、「自分にはよいところがある」「地域のことにふれたり、調べたりする活動が好きである」「地域や学校で先生以外の大人からほめられたり、認められたりして嬉しいと感じることがよくある」などの肯定的評価が高まってきた。児童に育みたい資質能力である、『児童が自尊感情を高め、自分の力に自信をもって生き生きと活動し、地域への愛着と誇りをもつ』が、地域貢献活動を通して、少しずつ高まっていると言える。

課題としては、より多くの保護者や地域に、この取組を発信していくことである。そのことで、子どもに関わる大人が増え、より児童の資質・能力が高まる機会が増えると考えている。

1 育むことを目指す資質能力

- ・目的に応じた対象を決め、自分たちの身近なところから情報を集める力。
- ・自分のよさやできることに気付く力。
- ・相手に応じて分かりやすくまとめ、表現する力。

2 教育課程への位置づけ、関連

主に、総合的な学習の時間

3 活動の実際

(1) 第3学年「学校から地域へ 木戸っ子探検隊」

第3学年は、前期に「ご案内します 木戸小学校」の単元で、木戸小学校の誇れるところや自慢を見付ける活動を行った。学校の沿革等が掲載されている記念誌をもとに調べたり、卒業生から話を聞いたりし、よいところを模造紙にまとめ、発表した。その後、「はちのす商店街たんけんたい」の単元を行っている。中山はちのす商店街にある「木下精肉店」で手作りメンチカツを食べた。“美味しさ”を感じた子どもたちは、木戸小学校の近くにこんな美味しいメンチカツが売っているお店があることを知り、中山はちのす商店街に対する興味をもった。

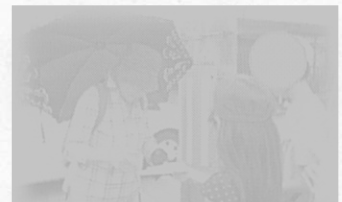
お店の清掃活動を経て、10店舗以上のお店に1時間程度の店員体験活動を行い、それぞれのお店のすばらしい所や、お店のよさを見つけた子どもたち。今後、自分たちりにまとめる活動を行う予定である。



木下精肉店のメンチカツを食べて大満足の3年生

(2) 第4学年「発信しよう 木戸自慢！」

第4学年では、前期に、木戸地域にある店舗の清掃活動や1時間程度の店員体験活動を行った。お店のよさを感じるとともに、街の活性化のために必要だと思うことを考え、実行に移した。店舗に赴いてポスターを貼ったり、店舗近くで、待ち行く人たちにチラシを配ったりして、お客様を呼び込むためのPR活動を行った。その後、自分たちの活動を振り返り、ポスターセッションという形で、お世話になった店舗の方や地域の方を招いて発表会を行った。



チラシを配付し、集客を呼び掛ける4年生

4 成果(○)と課題(●)(今後の取組)

- 自分たちがお店や商店街のためにできることを考え、実行した。このことにより、子どもたちの自己有用感の高まりが見られた。
- 学んだことや体験したことを通して感じたことをお店ごとにワークショップ形式で伝えることができた。その結果、相手に応じた表現方法を工夫して伝える力を伸ばすことができた。
- 上記2つの学習活動を教科横断的に教育計画の中に位置付けていくこと。



店舗や地域の方に向けて自分たちの成果と課題を発表する4年生

地域と関わりコミュニケーション力を発揮する児童の育成

東山の下小学校

1 育むことを目指す資質能力

コミュニケーション力の育成

いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力（文部科学省の有識者会議）

2 教育課程への位置付け、関連

目指す資質能力をコミュニケーション力と設定し、以下の数式で表している。

$$f(x) = cx + t$$

$f(x)$: コミュニケーション
 c : 子ども x : 関わる相手 t : 教職員

多様な x と関わることで、 $f(x)$ の力が高まっていく。そのため、図1のとおり当校の地域連携に関わる教育課程への位置付け、総合的な学習を中心に、地域と連携した学習活動を展開している。

東山の下小学校 学校と地域の連携・協働推進体制

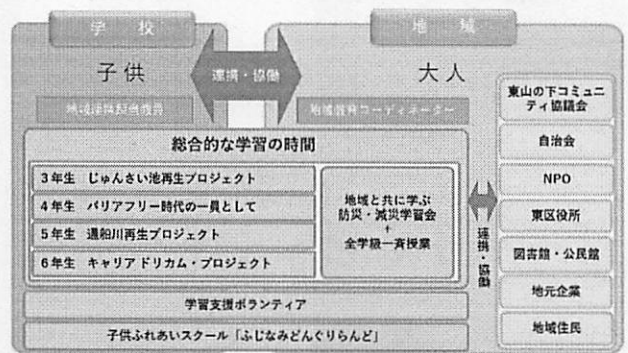


図1：地域連携に関わる教育課程の位置付け

3 活動の実際

3年生総合では、じゅんさい池を舞台に、地域の環境や自然などについて学ぶ。コミ協で環境保全に関わる方を講師に、じゅんさい池の歴史や自然環境について、実際に調査活動をしたりを教えてもらいながらコミュニケーションを図っていった。



図2：お宝情報かるた

教えていただいたことに対してお礼をしたいと考えた子どもは、学んだことを図2のように「お宝情報かるた」としてまとめ、文化祭時に展示した。お世話になった講師の方々をお招きし見ていただくなど、双方向のコミュニケーションを図った。

4 成果と課題（今後の取組）

地域の方々と積極的に関わる活動を取り入れることで、子どものコミュニケーション力は高まっていく。教育課程に地域連携活動を位置付けることで、意図的・計画的に資質能力が育成できる。今後も、地域貢献できる子どもの育成を図っていきたい。

地域とのかかわりを大切にし、心豊かな子どもの育成を目指して

桃山小学校

1 育むことを目指す資質能力

新学習指導要領では、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することが求められている。そして、以下のキー・コンピテンシーを設定した。

- A 資料を正確に読み取ったり、見学してきた内容のメモを文でまとめたりすることをとおして、問題関心に合わせて情報を整理・分類し、課題意識を高める力
- B 課題を解決するために、情報を数量・図形的に捉え、実験・観察も必要に応じて取り入れ、数学的・自然科学的に考える力
- C 課題を解決するために、情報を地理的性質・歴史的背景及び社会的性質から捉え、人々の願いや人の営みとしての工夫のあり方に気付き、考える力
- D 芸術（美術・音楽・文学・伝統芸能等）等表現されたものを味わい、その成り立ちや仕組みを知り、自ら模倣したり創造したりする表現活動を通して、感性を豊かにする力
- E 身体感覚を使って学び、見たり・聞いたり・触ったり・嗅いだり味わったりした五感を生かして、感覚的・身体的に表現しようという力

2 教育課程への位置づけ、関連

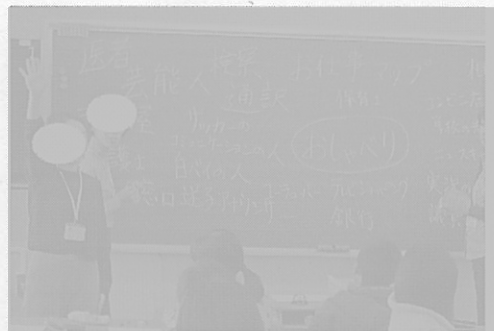
各教科と生活科・総合的な学習の時間を通して、地域社会とのかかわりを広げていくようにする。地域のお年寄りとのかかわり（昔遊び・桃山の昔）や地域探検（商店等施設巡り）、火力発電所・昭和シェル石油の見学等を行って、問題解決する力や人々の願いや工夫に気付き、考える力を身に付けさせる。また、それらの成果を保護者や地域に発信する。

3 活動の実際・・・第6学年

未来の自分へ TAKE OFF

昨年度から2学期の総合的な学習のテーマをキャリア教育に変更し、取り組んでいるところである。自分の適性について考えたり、将来の職業について努力すべき課題について調べたりすることで、自分の将来について考えるきっかけをつくるのがねらいである。NPO法人「キーパーソン21」の協力を得て、導入授業

「お仕事マップ」作りの活動を通して、好きなことや興味のあることが仕事につながり、多くの職業や自分たちには可能性があることに学んだ。今年度は、地域推進コーディネーターと協力して、新たな人材を発掘しているところであり、今の自分を見つめ直し、将来の夢を探る活動を進めていくことにしている。



4 成果と課題（今後の取組）

（1）成果

地域の方から学んだことを、新たな自分たちの発見として身に付けるだけでなく、引き続き興味をもって地域の方とのかかわろうとしたり、地域の行事に参加したりする姿が見られた。

（2）課題

当校は、地域教育コーディネーターの協力をもとに、総合学習を中心に地域とのかかわりを大切にしつつ、地域に対する子どもの興味・関心を育てるように取り組んできた。

地域の人材をいかにして発掘していくかが課題である。場合によっては高齢によって続けられなくなる場合があるが、より多くの人材や内容の拡充が必要である。また、他の学年の活動も含めて他教科との関連を図りながら、教科をこえて、目指す資質能力を意識して、取り組んでいく必要がある。

さらに、6年間を通して計画を見直し、指導内容に軽重をつけたり、単元を入れ替えたりしていく。これからも、課題に対して地域の方から情報を収集し、子ども同士がかかわり合いながら、資料を整理・分析し、課題を解決していく姿を求めていきたい。

1 育むことを目指す資質・能力

横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

2 教育課程への位置づけ、関連

学校の教育活動全体を通じて、児童の発達段階に応じた学びができるように、総合の年間指導計画を作成し、主な活動内容を明らかにしている。各学年の主な学習内容は、3年 地域、4年 国際理解・キャリア、5年 人権・福祉・キャリア・環境、6年 ボランティア である。また、指導計画には、主な活動内容の他に、ゲストティーチャーの有無、各教科や他学年とのかかわりも明示して記されている。

3 活動の実際

(1) 3年生の取り組み

単元名「下山の“やわ肌ねぎ”調査隊！」

下山地区で栽培されており、新潟が誇る特産物である「やわ肌ねぎ」を教材に学習を展開している。地元の生産者と一緒に植え付けや収穫を行ったり話を聞いたりする活動を通して、実際の収穫の様子や生産者の思いや願いを理解することができた。児童が、地元の特産物として、やわ肌ねぎを大切にしていかなければならないものであると自覚する学習となった。

(2) 4年生の取り組み

単元名「世界の国からこんにちは」

新潟空港の特色や役割を調べたり、外国の方や外国の知識がある方から話を聞いたりすることで、新潟空港が果たしている役割や、世界の国々の文化について学習することができた。

(3) 5年生の取り組み

単元名「下山を住みよい町にするには」

障がいのある方から話を聞く活動や、高齢者疑似体験や車椅子体験を通して、福祉について考える学習を行っている。さらに、危険な場所や不便な場所を探索する活動を通して、安全マップを作ったり、地域の改善点等まとめて市の行政相談員に提案したりするなど、地域が住みやすくなるような活動を行っている。

(4) 6年生の取り組み

単元名「わたしたちにできること～下山地域のために～」

例年、下山地域のお店や施設に協力してもらい、6年生が地域のためにできることについて考え、実践している。令和元年度は、2度の体験を行った。1度目の体験で、お店の仕事内容や抱えている課題について話を聞き、2度目の体験で、6年生が実行できそうな取組を提案した。



4 成果と課題

児童は、地域の方々の協力を得て、「自分たちにできること」を考え実践する中で、「空港のまち下山」の地域との繋がりを深め、誇りと愛着をもつことができた。また、仲間と共に一つの目的に向かって取り組んだ活動は、自己有用感を高め、互いを尊重し認め合うことの大切さに気付くことができた。

課題として、地域と学校両者の「育てたい子ども像」の共有や、中学校の3年間を含めた7年間の学習の流れの構築が挙げられる。今後は、それに向けて協働できる環境づくりを進めていきたい。

「い～てらす」が困っていることをぼくたちの力で解決しよう

牡丹山小学校

1 育むことを目指す資質能力

- すすんで考え、解決する力 ○自分から動く力 ○コミュニケーション力

2 教育課程への位置づけ、関連

総合的な学習の時間「地域素材を生かした学習活動」として位置づけ（5年生）

3 活動の実際

(1) 課題の把握

教師が「い～てらす」に取材に行き、職員から「い～てらすで遊ぶ子どもたちのことで職員が困っていること」を尋ねた。すると、「い～てらす」施設の利用の仕方「滑り台を逆走する」「登るネットを滑り降りる」「職員の注意をなかなか聞かない」という3つの課題があることが分かった。そこで「い～てらす」の紹介を含め、課題となっていることをプレゼンソフト「パワーポイント」を使って子どもたちに紹介した。

(2) 解決方法の検討

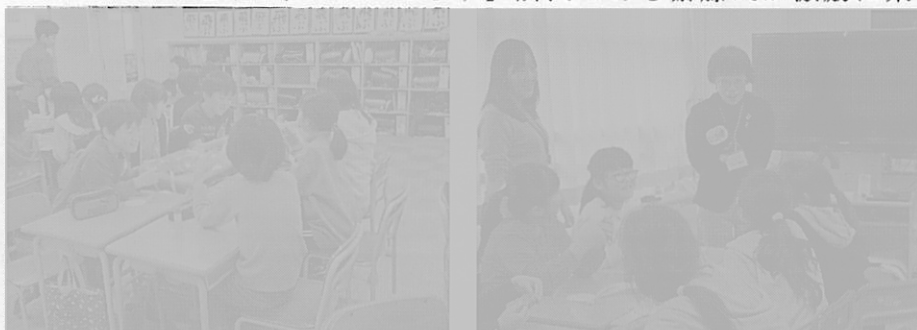
子どもたちに「5年生として『い～てらす』の方のために何かできることはないか」と問うたところ、子どもたちから様々なアイデアが出てきた。そこで、アイデアを「5年生としてできることか」という視点で子どもたちと検討し、今回取り組むことを仮決定した。（その後、「い～てらす」職員に可能かどうか確認し、最終決定した。）

(3) 自分が取り組むことの決定・実践

「い～てらす」職員が困っていることを5年生が解決する方法として、「注意を呼びかけるペンダント」「呼びかけポスター」「4コマ漫画風呼びかけポスター」「投書コーナーに投書」「呼びかけ新聞」「呼びかけチラシ」「校内放送で呼びかけ」に取り組むことになった。子どもたちは、7つの中から自分が取り組みたいことを選び、小グループを作って相談しながら、取り組んだ。子どもたちはとても意欲的に取り組み、完成したものを「い～てらす」に届けたところ、職員に大変喜ばれた。

4 成果（○）と課題（▼）

- 身近にある地域の施設「い～てらす」のことを深く知るよい学習機会となった。
- 課題解決の方法を自分たちで考え、自分のやりたい方法を選び、協力して課題解決に向けて取り組めたので、とても積極的に学習に取り組んでいた。
- 同じ方法の子どもたちで小グループを作って取り組んだことで、積極的にコミュニケーションしながら、どんどんアイデアを膨らませていくことができた。
- 活動の途中で、「い～てらす」所長である齋藤氏が激励に来てくださった。子どもたちは、活動に関わる方に直接お会いして激励の言葉を聞き、自分たちの行動が人の役に立っていることを実感でき、さらに積極的に学習に取り組んだ。



子どもたちは、活動に関わる方に直接お会いして激励の言葉を聞き、自分たちの行動が人の役に立っていることを実感でき、さらに積極的に学習に取り組んだ。

▼ 活動開始が寒い時期

で学校の教育活動の多忙な時期と重なったため、実際の施設見学等ができなかった。

計画時に見学等が実施できた方がもっと活動が深まった。

- ▼ 今回は活動途中に「い～てらす」の方に参加していただいたが、できれば活動当初から活動に関わっていただいた方が、より子どもたちが意欲的になったと考えられる。

高齢者福祉学習「あったかハートを広げよう」

東中野山小学校

1 育むことを目指す資質能力

- (1) 体験活動を通して、感じたことや調べたことを絵や文章などで表現することができる。〈学習方法に関して〉
- (2) 高齢者疑似体験やデイサービスでの交流を通して、社会福祉に関心をもち、世代・立場の違う人の気持ちを考えたり、疑問に思ったことを調べたりすることができる。〈自分自身に関して〉
- (3) 交流を通して、高齢者やそれを支える人々の願いに気づき、自分にできることは何かを考えたり提案したりできる。〈他者や社会との関わりに関して〉

2 教育課程への位置付け、関連

総合的な学習の時間(70時間)	他教科との関連
1 福祉って何だろう…12時間	社会「私たちの住む町」
2 私たちの校区…4時間	社会「私たちの市の様子」
3 見つけようユニバーサルデザイン…9時間	国語「話を聞いてメモをとろう」「調べてレポートを書こう」
4 お年寄りってどんな人…3時間	
5 お年寄りになってみよう…4時間	社会「はたらく人と私たちの暮らし」
6 あったかハートを広げよう…20時間	国語「盲導犬の訓練」
7 お年寄りに優しい夢の町発表会を開こう…18時間	国語「町について調べて紹介しよう」

3 活動の実際

(1) お年寄りになってみよう(9月11日)

子どもたちが、12名の地域ボランティアの方々とともに、動きづらいサポーター、見えにくいゴーグル、聞こえにくいヘッドフォンをつけ、新聞を読んだり、障害物をまたいだりする高齢者疑似体験を行った。世代や立場の違う人の気持ちやお年寄り・体の不自由な方との接し方、関わり方について考えることができた。

(2) あったかハートを広げよう(11月)

学級毎に地域のデイサービスを2回訪問した。1回目は、合唱を披露し自己紹介を行った後、「お年寄りに優しい夢の町」を考えるためのインタビュー活動を行った。学校に戻ってきた子どもたちは、「もう少しゆっくり話したほうがいい。」「普段より少し大きな声で話す。」など2回目の訪問で行う交流会でどのようなことに気をつけたらよいか、真剣に話し合っていた。2回目の訪問では、お年寄りといっしょにゲームやクイズをして楽しく過ごす中で、交流を深めることができた。



〈子どもたちの感想から〉

- お年寄りがこんなにたいへんだとわかりました。おばあちゃんに「遊ぼう!」と言ったとき、「足が痛いからだめ。」と言われた理由がわかりました。
- 字が小さいとわかりにくかったので、今度おじいちゃんやおばあちゃんに手紙を出すとき、字を大きく書こうと思います。

4 成果と課題(今後の取組)

高齢者疑似体験をデイサービス訪問の前に位置付けたことで、お年寄りがどのようなことで困っているか知ることができた。交流会では、どのようなことに気をつけたらよいかを考え、企画運営することができた。また、地域やデイサービスでの交流を通して、身近な親戚や家族のお年寄りを思いやることでできるようになった。

今後ますます子どもたちの身の回りにお年寄りが増えてくる。福祉学習や交流活動を通して、進んでいろいろな立場の人と関わり、よりよい活動、よりよい社会をつくっていかうとする態度を養いたい。

地域に学び、地域の中で自己の生き方を考える子どもの育成

竹尾小学校

1 育むことを目指す資質能力

探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、地域の課題を理解し、地域の一員として自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。

2 教育課程への位置づけ、関連

- | |
|--|
| 1 年生生活科：地域の方と公園巡りをする。「昔遊び」をお年寄りと楽しむ。 |
| 2 年生生活科：町探検を通して地域のよさを知り、地域の皆さんと触れ合う。 |
| 3 年生総合：地域の菊農家の方から菊について学び、菊を育てる。育てた菊を地域に披露する。 |
| 4 学年総合：ツクイ新潟竹尾の皆さんと交流する。（訪問交流や運動会など） |
| 5 年生総合：地域の方から米作りについて学ぶ（田植え、草取り、稲刈り、収穫祭など） |
| 6 年生総合：キャリア教育としての地域の専門家から生き方や仕事について学ぶ。 |

3 活動の実際

(1) 総合「大好きにいがた体験 TAKEO マイ（米）フード、マイ（米）ライフ」（5 学年）

4 月から JA の協力のもと学校田をお借りすることでできた。きらきらコシヒカリを作る人々の工夫と思いに迫る活動を通して、食糧生産や農業事情を考え、地域への愛着を深める学習である。一年間を通して、主体的な活動を組織し、意欲の継続を図るとともに「米作り」を身近な存在として学習を進めた。収穫祭では、「米余り」「生産調整」「米の輸入・輸出」「生産者の減少・高齢化」のテーマを参加者へ向かって発表した。自分たちの作ったお米をおにぎりにして会食し、お土産として 2 合のお米をプレゼントした。

(2) 総合「夢に向かって～自分の将来を見つめよう～」(6 学年)

地域で働く夢をもって生きている人々・働く人々の思いと生き方を知ることによって、夢に向かって努力することの大切さを学ぶ活動である。地域の調理師・美容師・保育教諭・カメラマン等のゲストティーチャーをお招きし、働く人々の思いと喜び、苦労と生き方、やりがい等、体験を通しながら活動することによって、今の自分にできることとすべきことに迫る。コミュニケーション能力はすべての職業で大切なこと、地域の人の役に立つ仕事ができる喜びを感じることができた。この学習をもとに、将来の自分を見つめ、「どんな大人になりたいか」への糸口を見つけられたと考える。



4 成果と課題

5 年生は、地域での米作りに関する問題点を探った。「米を食べる人が減っている」「後継者がいない」等の問題点を見付け、お米を食べたくなるような CM を作る」「体験して楽しかったことを新聞にまとめて配る」等、問題を解決する「突破方法」として提案することができた。

6 学年は、ゲストティーチャーに出会う前に「どんな仕事があるのか」「なってみよう職業」を調べてみると、たくさんの職業があることに気付き、将来へ広がりを見せた。選択肢を広げたことは成果として挙げられるが、児童の夢は多岐に渡る。この多様なニーズをもう少し幅を広げ、主体的な調べ学習、体験につなげる必要がある。そのために総合的な学習の時間の細分化した指導計画の修正が必要である。

地域に愛着と誇りをもつ子の育成

南中野山小学校

1 育むことを目指す資質能力

「ひと・もの・こと」から学び、ふるさとを愛する心を育て、地域に誇りを持ち、地域に貢献したいという願いをもつ。

2 教育課程への位置づけ、関連

1年生：生活科「はる・なつ・あき・ふゆ のあそび」

・地域の公園に行き四季の変化を見つけたり、見つけたもので遊んだりして、地域の公園に親しむ。

2年生：生活科「町たんけん」

・地域にある店からお気に入りの店を見つけ見学やインタビューを行い、分かったことをまとめて発表する。

3年生：社会科「わたしたちのまちはどんなまち」

・学校を中心に四方位の方向に探検に行き、学区を絵地図にまとめ、地域の土地利用の様子を理解する。

3年生：総合「ちいき すてき 発見」(地域)

・地域にある「すごぼり」で定点観察を行うことを通して「すごぼり」の魅力を発見し、まとめたことを発信する。

4年生：総合「人にやさしく」(福祉)

・地域の特別養護老人施設を訪問し、お年寄りとの交流を通して、地域のお年寄りへの優しさやお年寄りを大切にする気持ちをもつ。

5年生：総合「米フレンド」(稲作)

・地域の方から稲作の指導を受けながら、稲を育て、稲作の大変さや、工夫、収穫の喜びなどを学ぶ。

6年生：総合「私・出会い」(キャリア教育)

・地域で活躍する人や、様々な職種で活躍している卒業生から話を聞くことを通して、自分の生き方について考えていく。



3 活動の実際

3学年は総合的な学習の時間で「ちいき すてき 発見」という題材に取り組んだ。地域にある堀「すごぼり」は桜の名所で、桜の時期には近隣だけでなく遠方からも花見客がたくさん訪れる子どもたちの自慢の場所である。しかし、桜の季節以外は、子どもたちは「すごぼり」には行ったことがなかった。しかし、何度も足を運ぶうちに景色や生き物や木など自分の「お気に入り」を見つけることができた。二十四節気ごとに観察に行き、自分のお気に入りの「もの」の、変化を見つけていく活動を続けることで、お気に入りの「もの」や「すごぼり」への愛着を抱くようになった。桜の季節以外にもたくさんの魅力があることを「すごぼりパンフレット」にまとめ、保護者や地域の方に学習の成果を紹介することができた。



4 成果と課題(今後の取組)

地域の方は学校の教育活動に協力を惜しまずに力を貸してくださる。子どもたちは地域の祭りに参加したり、クリーン作戦に参加したりと、地域の一員としての自覚が育ってきている。今後は地域教育プログラムの成果を確実に教育計画に位置付け、地域の方とともに充実、発展させ、地域への愛着と誇りをさらに深めていきたい。

地域社会と積極的につながり 地域社会と共に子どもを育てる学校づくりの推進

江南小学校

1 育むことを目指す資質・能力

- 地域の人・もの・ことに関わる探究的な学習において、課題解決に活用できる知識・技能を身に付けるとともに、地域の良さに気づき、自分たちの生活とつながっていることを実感することができる。
- 地域の人・もの・ことの中から問いを見だし、解決に向けて情報を集め、整理・分析し、まとめ、表現することができる。
- 地域の人・もの・ことを愛し、探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、かかわり合うことを愉しみながら自分の考えを広げ、深め、自己の生き方に生かそうとする態度を養う。

2 教育課程への位置づけ(5年生の例)

- ・総合 「お米探検隊(34時間)」「食を見つめて(38時間)」
- ・社会 「米作りの盛んな地域(9時間)」
- ・家庭科 「ご飯と味噌汁を作ろう(7時間)」
- ・学活 「安全な食べもの(1時間)」「食の指導(1時間:栄養教諭による指導)」

3 活動の実際

- ・ 5月・・・アグリパークで田植え体験、校内でバケツ稲(総合)
- ・ 7月・・・米作りの盛んな地域(社会)
- ・ 10月・・・アグリパークで稲刈り体験(収穫したお米をもらう)バケツ稲収穫・天日干し(総合)
校区内の味噌製造会社「渋谷商店」の方に来ていただき、話を聞く。
- ・ 11月・・・自分たちが作ったお米を炊き「渋谷商店」から頂いた味噌で味噌汁を作り、収穫祭。



4 成果と課題(今後の取組)

5年生のゲストティーチャーとしてお願いした「渋谷商店」は、『地域とつながる江南小を考える会』(G&T会)で話題になったことがきっかけで、地域の方に紹介していただいた企業である。この『地域とつながる江南小を考える会』(G&T会)の活動は、平成29年度から始まり、今年度で3年目となる。毎年2回ずつ開催し、学校の教育活動を紹介し、よりよい活動になるよう保護者や地域の方から意見を聞く貴重な機会となっている。今後は実施時期や時間を考慮することで、保護者も学校職員も参加しやすい会にし、多くの参加者を募ることが課題である。

地域貢献活動「絆づくり」プロジェクト



～「めあてをもち、進んで行動する子」(東新潟中学校区目指す子ども像)の実現に向けて～

1 育むことを目指す資質能力

東新潟中学校では、グループやコミュニティで協働する実践力、自己理解や他者理解を促すコミュニケーション力を育むことを目指しています。地域貢献活動「絆づくり」プロジェクトを展開する中で、地域や異学年との交流から、これら資質能力を醸成し、ひいては、東新潟中学校区(沼垂・笹口・木戸小)の目指す子ども像「めあてをもち、進んで行動する子」の具現に迫りたいと考えています。

2 教育課程への位置づけ

当校教育ビジョン実現のための手立てに「特別活動を柱に自律性・社会性を育む」があります。地域貢献活動はその視点に立ち、活動の理解や振り返り等、事前事後の活動を重視した特別活動(学活・学校行事)として教育課程に位置づけています。活動自体は土曜日の午前中に行われ、午後からは、教育ビジョン実現のためのもう一つの手立てである「対話的な学び」を意識した授業公開をおこないました。



<中山団地の公園>

3 活動の実際

「東新潟地区青少年育成協議会」を窓口にして、各地区のコミュニティ協議会・自治連合会の支援をいただきながら、自治会に案内を出して活動をしています。また、東新潟中学校PTAの保健厚生部の年間活動にも位置付けています。1・2年生は校区内地域6カ所、3年生は校地内に分かれ、除草及び清掃活動を行いました。また、この活動に併せて、PTA四役が中心となり「豚汁づくり」の活動をしています。地域貢献活動が終わった後、中学生だけでなく、一緒に活動して下さった保護者・地域の方々・教職員にも振



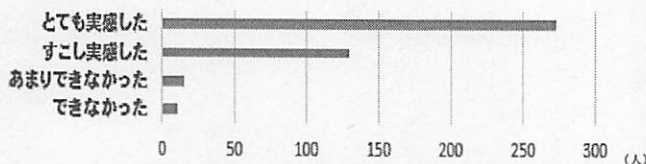
<PTAの豚汁づくり>

る舞われます。保護者・地域の方々の参加者も年々増加し、東新潟地区青少年育成協議会の役員や各自治会の方も含め、約100名が一緒に活動していただきました。

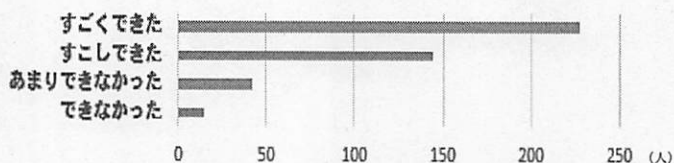
4 成果と課題

(1) 生徒の振り返りアンケート結果(10月5日実施)

地域の素晴らしさや地域の方々の温かさを実感できましたか?



学年・学級を超えた絆づくりができましたか?



(2) まとめ

生徒の感想文や振り返りアンケートから考察すると、地域や仲間との協働によって充実感、達成感を得ることができ、絆が強まったと考えます。当日参加された地域や保護者の方々からは「多く子どもたちと会話ができて楽しかった。皆、積極的に動いてくれた。」「子どもたちの一生懸命奉仕する姿を見ることができて心が温まった。」等の感想をいただきました。このように、生徒一人一人が地域貢献活動を通して輝く姿をあらわすことができました。ここに、協働する実践力や地域社会とのコミュニケーション力が少なからず培われたのではないかと考えます。

活動にあたり、地域・保護者の皆様の多大なるご支援に感謝すると共に、今後も、実施時期や実施方法・内容を工夫し、地域のニーズに合った、生徒・保護者・教職員に過重な負担がかからない、持続可能な活動として継続しながら、目指す子どもの姿「めあてをもち、進んで行動する子」の具現に迫りたいと考えています。

地域とともに育む防災意識

山の下中学校

1 育むことを目指す資質能力

- ・生徒の地域防災への意識を高める。
- ・防災教育で学んだことを活用して、地域の一員として協力できる資質を身に付けさせる。
- ・主体的に考え、判断し、地域防災の課題を解決できる態度を育成する。

2 教育課程への位置づけ・関連

- ・2年生の総合的な学習の時間に行った。また、保健体育科の保健分野「傷害の防止」の単元と関連づけて行った。

3 活動の実際

○会場 新潟市立山の下中学校体育館・ランチルーム

○指導者 東区役所総務課職員 中地区公民館職員 新潟東消防署山の下出張所職員

○参加者 山の下中学校2年生 126名

○体験活動の概要

(1)心肺蘇生法実習【東消防署山の下出張所】

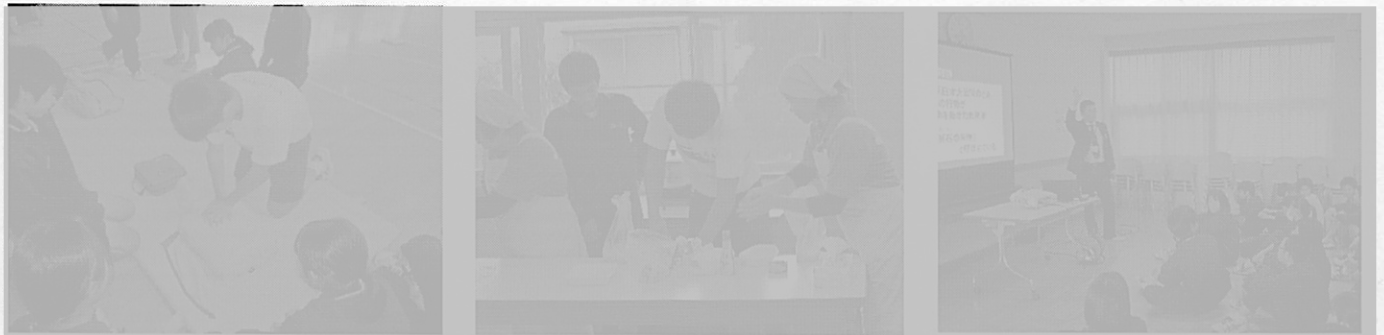
- ・訓練用マネキンや訓練用キットを使って、心肺蘇生法及びAEDの実習を行う。

(2)バッククッキング【食生活改善推進委員・公民館職員】

- ・袋などを利用し、手軽にできる防災食を作り、試食する。今回は親子丼を作った。

(3)防災講話

- ・東区総務課の職員の方から、ハザードマップを基に山の下中学校区の危険なところや避難所などの説明をしていただいた。



AED 体験

バッククッキング

防災講話

4 成果と課題

成果

- ・体験活動を取り入れたことで、生徒は心肺蘇生法の手順などを一つ一つ丁寧に学んだり、普段行わないような調理方法で簡単に調理できることを知ったりすることができた。また、地域の方を講師としてお招きし、身近な場所の防災について共に考えることを通して、生徒一人一人の地域防災の意識が高まった。

課題

- ・年度初めに教育課程に位置付けておらず、今回の取組も突発的に入ってきたものであるため、事前学習などが不十分であった。生徒一人一人の防災意識を高めるためには、段階的な指導が必要であると考えられるため、今後どのような形で教育課程に盛り込んでいくかが課題である。

地域を支える夢と希望をもった生徒の育成

大形中学校

1 育むことを目指す資質能力（「総合的な学習」全体計画より）

<知識・技能>

- ・防災など現代的な課題に対応するための知識・技能
- ・働くための知識・技能

<思考力・判断力・表現力>

- ・困難や問題点から自己の集団の課題を設定し、課題解決に向けて取り組み、自分の考えをまとめたり発信したりする力

<学びに向かう力、人間性>

- ・どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るかを考え、目的意識をもって学ぶ態度
- ・多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどを発揮しようとする態度



2 教育課程への位置づけ、関連

当校においては、地域防災学習を中核におくことで、地域の実情を知ると共に、防災に関する知識を身に付け、地域のためにできることを率先して取り組もうとする生徒の育成を目指している。

3 活動の実際（「地域を知る」活動から）

- 認知症サポート養成講座（3学年対象）：10月実施

地域包括支援センター木戸・大形の齋藤るり子看護師、足立康彦介護福祉士、星山 大社会福祉士、遠山 茜社会福祉士の4名を講師として招き、認知症の特徴と行動特性を学ぶ講演会を実施した。

講演会では、行動特性をよりわかりやすく伝えるための寸劇やスライドを用いた説明等がなされ、生徒も興味をもって臨むことができた。

また、認知症の特徴・特性を理解し、適切に行動することの重要性が述べられ、避難所においても配慮を要するために、中学生の協力が不可欠であるとの説明があった。

核家族が増加し、高齢者と日常的に接する機会が少なくなっている現状において、中学生に期待する役割が具体的に述べられたことで、生徒にとって避難所での行動をより具体的に想起できる機会となった。

活動の振り返りでは「その高齢者に合わせた対応の必要性を感じた」「中学生は率先して協力しなければならない」等の記述が多く見られ、今後の提案につながる活動となった。



4 成果と課題（今後の取組）

前期学校評価で地域に関する項目の肯定的評価を行う生徒の割合は以下のようである。

- 地域や学校で先生以外の大人からほめられたり、認（みと）められたりして、うれしいと感じることがよくあります。（H30後期：61%→R1前期：73%）

- 地域（ちいき）のこと（自然・歴史・産業など）にふれたり、調べたりする学習は好きです。（H30後期：54%→R1前期：64%）

地域に関する項目において、前年度後期よりも大幅に肯定的評価する生徒の割合が増えた。地域の方に関わってもらいながら、地域のために学んだ教育課程の成果の一つである。

今後は肯定的評価をする生徒を8割以上にすることを旨すと共に、地域を学ぶことを通して、生徒の思考力・表現力・判断力等の育成に努めていきたい。

絆を深め、響き合い、笑顔と感動あふれる教育 ～地域・学校が目標を共有し、協働する活動の推進～

石山中学校

1 育むことを目指す資質能力（本年度策定）

昨年度より、石山の子どもたちを一層地域・学校ぐるみで育むために、幼保小中・保護者・地域・行政の代表の方々等総勢約七十名の関係者が集い、「石山の教育を語る会」を開催している。回数を重ね、「目指す子ども像」とそれに伴う「育みたい資質能力」を以下のように共有することとなった。

生活を楽しみ、これからの時代を創る子ども

- 自己を知り、よりよく生きる態度や能力<自立>
- 広い視野から認め合い、支え合い、高め合う態度や能力<共生>
- 見通しをもち、課題解決に向かう態度や能力<挑戦>



2 （今までの）教育課程への位置づけ、関連

主に、総合的な学習の時間の中で、「防災教育」の領域に位置づけ、協働活動を組織している。

- 1年 自ら生き抜く力を身につける。（防災に関する技術を身につける）
- 2年 学びを発信・活用する力を身につける。（地域の実態とかかわり方を学ぶ）
- 3年 総合的な学び、実践力を身につける。（中学生として何ができるかを学び、実践する。）

3 （本年度の）活動の実際

（1）全校としての活動

- 5月「自治会別懇談会」 ※地域代表の方を招聘し、地域のニーズ、危険個所を知る。
- 6月：「避難訓練」全校防災学習（災害時における地域の特徴、中学生の役割）※地域代表の方招聘
- 11月：「避難訓練」全校防災講演会、自治会ごとの集合訓練 ※講師 東区総務課による出前授業

（2）学年としての取組（全校としての活動との関連を図りながら）

① 1年防災学習

- 1月：消防署・消防団によるAED等の講習会、防災工作 3月：地域の方を招いての発表

② 2年防災学習

- 5月：防災士の方を招き、自然災害時の行動、校外学習の着眼点を学ぶ。
- 6月：現地調査活動（中学校区を地域の人と一緒に歩いて確認し、防災マップを作る。）
- 10月：6月から作成した防災マップを文化祭で公開。
- 11月：代表が小学校を訪問し、児童への発表を通して学びを深める。



4 成果と課題（今後の取組）

成果としては、新潟市学習・生活意識調査の結果から、「地域や学校で先生以外の大人からほめられたり、認められたりしてうれしいと感じる」「地域のことについて、調べたりする学習が好き」「自分で考え課題を解決したり、自分で判断して行動したりする」等、当校教育目標「自立」「共生」「挑戦」の視点に関わる項目において、昨年度より肯定的評価が全般的に高まっている。

課題としては、本年度策定された目指す子ども像と資質能力が全教育活動を通じて育まれるよう、資質能力との関連を明確にし、整理していく必要がある。「社会に開かれた教育課程」をスタートし、これからの社会をたくましく・しなやかに生きる生徒を育成していきたい。

「新潟市・東区のよりよい未来のまちづくり」～総合3力年の実践を通して～

木戸中学校

1 育むことを目指す資質・能力

- 複雑な問題状況における事実や関係を把握し、自分の考えをもつ力
- 考えを基に、課題解決の見通しをもつ構想力
- 自己の将来を考え、夢や希望をもつ想像力
- 様々な情報や自己の興味・関心を基に、自分の進路を選択する力
- 異なる意見や考えを受け入れ尊重する態度
- 自らの考えを基に他者に発信する力

2 教育課程への位置づけ、関連

【総合的な学習の時間の学びを通して目指す生徒の姿】

- ・ 地域や社会、世界との自分とのかかわりに目を向け、現代的な課題と自己との関係を意識しながら、よりよい社会の在り方、自己の在り方を探究し続ける生徒
- ・ 探究に必要な情報の収集、分析、整理、表現のための方法や技能、仲間と協働するための態度や方法を身に付け、積極的によりよい自己や社会の実現に取り組む生徒

3 活動の実際…3力年を通して「新潟市・東区のよりよい未来のまちづくり」を探っていく。

<前期>

<後期>

1 学年 仲間作り・集団作りを通した
「学び方」の学習、SEL, SGE

⇒ 地域・課題をを知る学習・職業講話



「かかわり」をキーワードに野外体験活動やファシリテーション等を通して学び方を学ぶ活動



- 追究テーマ
- ①にぎわいと活力
 - ②観光と文化振興
 - ③やすらぎと環境
 - ④国際交流
 - ⑤福祉と子育て
 - ⑥安心安全と防災

2 学年 新潟フィールドワーク① (NFW) ⇒

東京フィールドワーク (TFW)

- 追究テーマ
- ①にぎわいと活力
 - ②観光と文化振興
 - ③やすらぎと環境
 - ④国際交流
 - ⑤福祉と子育て
 - ⑥安心安全と防災



- 追究テーマ
- ①にぎわいと活力
 - ②観光と文化振興
 - ③やすらぎと環境
 - ④国際交流
 - ⑤福祉と子育て
 - ⑥安心安全と防災

新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター
新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター	新潟県立総合サービスセンター

3 学年 新潟フィールドワーク② (NFW) ⇒

地域発信・まちづくりプランの提案

- 追究テーマ
- ①にぎわいと活力
 - ②観光と文化振興
 - ③やすらぎと環境
 - ④国際交流
 - ⑤福祉と子育て
 - ⑥安心安全と防災

同一テーマによる新潟での2回のフィールドワークと、東京フィールドワーク(修学旅行)での調査結果とを比較し提言をまとめる活動

- 1組・地域事業所への掲示依頼
- 2組・自治会回覧板による周知
- 3組・全校発表による提案
- 4組・学校HPによる発信
- 5組・区役所での提案の掲示(学級ごとに違った方法で発信)

◆成果(○)と課題(●)、今後の取組について

- 新潟市生活・学習意識調査の昨年度との比較では2・3年生どちらにも向上が見られる。
- 地域との関わりに関する数値にも向上が見られる。
- プランの発信については、地域・自治体等から、意義は理解するが提案の内容が抽象的との指摘も受けた。より具体的な提案としていくための支援が必要である。

1 育むことを目指す資質能力

- 地域の人・もの・ことに積極的にかかわり、他者と協働して問題解決に取り組み、自己のよさに気づく。
- 地域への愛情・愛着をもち、そのよさを伝える。
- 地域の課題について考え、地域の一員として、主体的に行動しようとする。

2 教育課程への位置づけ、関連

(総合的な学習の時間)

キャリア教育として、1年生時「福祉体験活動」(1日)、2年生時「職場体験」(2日)、3年生時「職場訪問」(修学旅行時に東京都内で1日)「上級学校訪問」(1日)を実施している。また、生徒会が地域のためにできることを考え奉仕活動を行う「BS(ベストスクール)活動」(2時間)も行っている。

(特別活動)

地域コミュニティー協議会と小中学校共催という形で、地域防災訓練(半日)を実施している。

(課外活動)

地域・保護者代表と小中学生代表、小中学校職員代表で、「未来づくり委員会」と称し、地域の課題と課題解決の方策を話し合う場(1回90分)を設定している。(年2回)

3 活動の実際

【1年生 福祉体験活動】事前学習の1つとして新潟医療福祉大学の学生による「認知症サポーター養成講座」を受講した上で、3～5人のグループで地域の福祉施設47箇所に分かれて、幼児やお年寄り、障害者の方のお世話やお手伝いをさせていただいた。

【2年生 職場体験】2～4人のグループで、60箇所の事業所に分かれて、職業体験をさせていただいた。相手の目線に立って行動することやお客様によりよいサービスをどのように提供するかなど、日常生活ではできない体験をし、働くことの「意義」「楽しさ」「苦勞」等を実感することができた。

【3年生 都内の職場訪問】3～5人のグループで、都内19箇所の事業所に分かれて訪問してきた。全国的にも有名な企業への訪問は、生徒たちの視野を広げる貴重な体験となった。

【3年生 上級学校訪問】4～6人のグループで、23箇所の専門学校や大学に分かれて、訪問させていただいた。高校に入ればよいという安易な考え方でなく、高校卒業後も見据えた上での進路選択を意識するよい機会となった。

【BS活動】3年生が事前に下見をして、どのような奉仕活動をするか考えておいた地域の場所を、1～3年生の縦割り班37班に分かれて、ゴミ拾い、草取り、公園遊具の清掃等を行った。活動後きれいになった場所を見て多くの生徒が気持ちのよい思いや達成感を味わうことができた。また、3年生は縦割り班のリーダーとして働き、最上級生としての自覚の高まりにも繋がった。

【地域防災訓練】地域コミュニティー協議会が企画運営する防災訓練に、小中学生も地域の一員として参加し、1次避難と2次避難を体験した。2次避難で各学校に避難した後は、小学生は津波避難訓練後学校の授業に戻り、中学生は地域消防団の方からAEDや車椅子の使い方、応急担架の作り方などの救急法についての講義を受けた。災害時に地域のために役立つ中学生になりたいという気持ちが強まった。

【未来づくり委員会】地域・保護者代表と小中学生代表、小中学校職員代表で、地域の課題と課題解決の方策を話し合い、できることから実践するようにしている。一昨年度出された「地域と小中学校合同あいさつ運動」を、各自治会・学校にあいさつ運動ののぼり旗を配付したり、年1回を2回に増やしたり、中学生が小学校に行って行ったりというように、2年かけてバージョンアップさせている。

4 成果と課題

各活動とも、育むことを目指す生徒の資質能力育成に大きな効果を上げている。年度ごとに振り返りを丁寧に行い、改善を加えながら、教育効果を上げる努力もしている。しかし、職場体験受け入れ先確保の難しさや上級学校訪問の時期が適切でない、また、地域連携は大切にしたいのだが時間確保が年々苦しくなるという課題がある。職員、地域・保護者、学区内小学校とよく相談しながら、課題解決を図っていきたい。

地域から学び、地域や社会とのかかわりを豊かにする生徒の育成

下山中学校

1 育むことを目指す資質能力及び態度

① 学習方法に関すること

- ア 必要な情報を獲得し分析する能力
- イ 主体的に解釈し考察する能力
- ウ 問題や課題を見出す力と、自ら目標を設定する力
- エ 課題解決・目標達成のための計画を立て、実行・推進する力

② 他者や社会との関わりに関すること

- ア 集団の一員として目標達成のために必要な活動を協同的かつ計画的に推進する力
- イ 地域社会の形成者としての役割と責任を理解して行動する力

③ 自分自身に関すること

- ア 自己を理解しその資質の伸長に努める態度
- イ 集団や社会において自己の能力を積極的に発揮し貢献しようとする態度

2 教育課程への位置づけと活動実際

- ① 1学年総合(22時間)「福祉と共生」障がいとともに生きる方や支える方との交流を通して、身近な地域の福祉の実態を知り、「福祉と共生を実現するための一人一提言」をまとめた。

- ② 2学年総合(32時間)「働く意義や自己の生き方」～地域の事業における職場体験学習～ 地域の事業所を訪問し、職場体験を行った。身近な地域で実際に体験することを通して、「勤労と職業」「社会におけるマナーやコミュニケーション」について学んだ。

- ③ 3学年総合(20時間)「福祉と自己の役割」～地域の福祉施設における入所者との交流～ 地域の福祉施設を訪問し、お年寄りや施設職員の方々との交流を通して、地域における「高齢化と課題」「高齢者福祉の実態とニーズ」について学んだ。

- ④ 3学年総合(7時間)「防災と地域貢献」～防災学習における自治

会長との協議～地域の自治会長(防災担当者)を招き、避難所における中学生の役割を地域の方とともに考える活動を通して、中学生も地域の一員であることを認識し、地域社会の形成者としての自己の役割に自覚をもつことができた。

3 成果と課題(今後の取組)

地域の方とかかわり合いながら学ぶ体験的な学習の機会の設定と充実を図っているものの、昨年度は3年生で極端に自己有用感が下がっていることが課題であった。今年度は、学年が上がるにつれて、少しずつ自己有用が高まってきている。生徒がより自分の生き方に結び付けて考えていけるように生徒の学びの場やその学びの課程をさらに工夫していく。